

Wessex Tales 試論

吉井浩司郎

I 序論

1888年5月4日に、2巻本で出版された *Wessex Tales* は、ハーディの短編集としては最初のものであった¹⁾。この1888年版は、“The Three Strangers”、“The Withered Arm”、“Fellow-Townsmen”、“Interlopers at the Knap”、“The Distracted Preacher”、の5作品で構成されていたが、1896年に“An Imaginative Woman”が追加され、そして、the 1912 *Wessex Edition* すなわち通称ハーディ小説の決定版において、“An Imaginative Woman”が削除されて、その代わりに、“A Tradition of Eighteen Hundred and Four”と“The Melancholy Hussar of the German Legion”の2作品が追加されて、現在の *Wessex Tales* は7作品で構成されている²⁾。

この短編集を扱うときに我々が最初に直面する困難は、この短編集に関する研究文献の少なさであろう。この短編集を本格的に扱っている研究は、Kristin Brady の *The Short Stories of Thomas Hardy*³⁾、Martin Ray の *Thomas Hardy: A Textual Study of the Short Stories*、そして、Oxford World's Classics 版の *Wessex Tales* に付された Kathryn R. King による“Introduction”くらいだろう。大多数のハーディ小説の研究者たちはこの短編集についてほんの少し言及するか、あるいは、全く言及していない。要するに、ハーディ小説の研究の中では軽視されたまま、と言うべきか。J. I. M. Stewart にいたっては、ハーディの短編を“pot boilers”⁴⁾ (金目当てのつまらない作品) と決めつけて、まともに論じるに値しないとしている。

この小論は、ハーディ小説の研究の中で以上のように軽視されているこの短編集をいかに評価できるかを探ろうとするものである。

II *Wessex Tales* における語りの特徴

ハーディは、*Wessex Tales* なるものを当初から編纂しようとして個々の短編を創作しようとしたのではなく、単発的に、また、作品の舞台もあちこちに点在するという形で個々の作品を創作したのであり、個々の作品が発表されたのも“The Distracted Young Preacher”の1879年4月から“The Melancholy Hussar of the German Legion”の1890年1月にかけてで、発表された雑誌もばらばらである⁵⁾。また、Kristin Bradyが述べているように⁶⁾、*Wessex Tales* には、貴族階級とか gentry 階級の人々が描かれていないのを除けば、“The Three Strangers”の羊飼いか職人から“Fellow-Townsmen”の比較的裕福な商人まで、様々な人々が描き出されている。

作品の扱う時代も、“The Melancholy Hussar of the German Legion”の1801年から“Fellow-Townsmen”の1845年とか“Interlopers at the Knap”の19世紀中頃という具合にバラバラである。

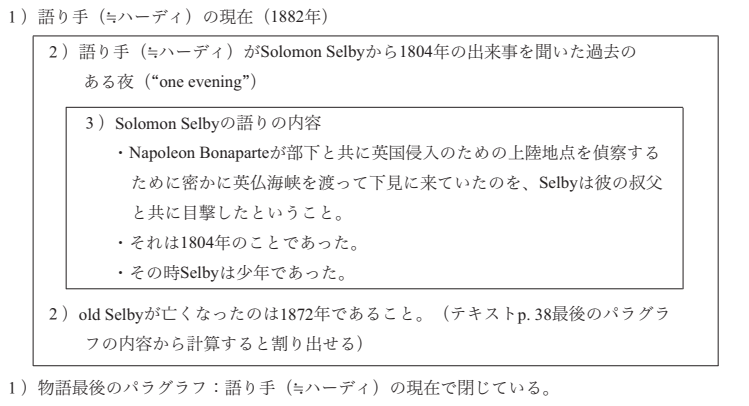
個々の短編が単発的に創作されたせいも、個々の短編の形式が様々であり、統一されてはいない。例えば、「1804年の言い伝え」のように三重の時間枠の入れ子構造を持つものがあったり、時間の枠組みにおいて、語り手の現在時制で始まり、語り手の現在時制で終わるという時間の入れ子構造を持っていたり、あるいはまた、third-person narratorが過去の物語を語るという通例の narration を持っていたりと、様々である。

従って、この短編集の語りの特徴を一纏めに論ずることはできないが、しかし、ハーディとおぼしき語り手(≒ハーディ)の語りの特徴を見ていけば、この短編集の特徴を明らかにできるのではないと思われる。

その語りの特徴を明らかにしようとするとき、まず注目すべきは、語り手の現在から、過去の過ぎ去ったもの(出来事、人物等)に対する語り手のノスタルジックな眺望の眼差しである。それがそれぞれの物語に、物語の構造を与えている。すなわち、語り手のこの眺望の視線が、物語が語り手の現在で始まり、語り手の現在で閉じるという、そして、その中に物語内容が包み込まれているという、時間枠の入れ子構造に反映しているのである。

その最も典型的な物語が“A Tradition of Eighteen Hundred and Four”だろう。語り手(≒ハーディ)の現在(1882年)が物語の最も外側の時間枠を構成し、その中にその語り手(≒ハーディ)がSolomon Selbyから1804年の出来事の話聞いた過去のある夜(“one evening”)のことが盛り込まれ、更にその中に、Solomon Selbyの語りの内容が盛り込まれている、という時間枠の三重の入れ子構造をこの物語は持っているのである。それを図示すると次頁の冒頭のようになる。

この語り手の特徴の中で次に注目すべき点は、ウェセックスの各地域に残る過去のエピソードを文字化したいという動機を持っていることである。これは語り手というよりもハーディの動機と言うべきか。そしてここで、*Wessex Tales* の創作の動機としてKristin Bradyが述べてい



“A Tradition of Eighteen Hundred and Four”における語りの入れ子構造

ることを紹介しておこう。

Wessex Tales 中の短編が書かれた時期は、ハーディが田舎のドーセットと“the contrasting world of London”との間を、住居を行ったり帰ってきたりと度々移していた頃で、この頃ハーディは Dorset の風景と文化とがいかに都会の人々に誤解されているかを認識し、その認識のもと、“The Dorsetshire Labourer” (1883) を制作したのであった。それと同時に、都会の人々は田舎の人々のことを十把ひとからげにして Hodge (田吾作) だと誤解しているが、この誤解を解くべくハーディは、田舎の人々は個々の個性を持ったそれぞれの人物であることを示そうと、事実に基づいたエピソードを創作した、と Kristin Brady は述べているのである⁷⁾。そして、そのように創作された作品群が、*Wessex Tales* を構成する個々の短編なのである。

このような語り手 (≡ハーディ) の姿勢は、物語内容を語るに際して、正確を期するため様々な出典を調査し、その調査内容に依拠して語ることになる。この小論の巻末に表にして明らかにしているように、中でも最も多くのソースに依拠して語っている“The Melancholy Hussar of the German Legion”に関して紹介するなら、ハーディは以下の4種類のソースに依拠しているのである。まず1) 二人のヨーク軽騎兵の処刑を目撃した James Brushrod of Broadmave が James Selby にその内容を語り、この Selby が the writer (=ハーディ) に語ってくれたのである。また2) ハーディは1801年7月6日号の *The Times* からの切り抜きを添付していたのである。更に3) ハーディはこの物語の女主人公 Phyllis とおぼしき老婆から直接にこの物語の元となるエピソードを聞いていたのであり、また4) ハーディ自身でも処刑された二人の軽騎兵が埋葬されている教会の記録簿で確認作業を行っているのである。

このような姿勢を持つ語り手 (≡ハーディ) を Samuel Hynes は “parish historian”⁸⁾ と呼び、Kristin Brady は “the pastoral voice”⁹⁾ と呼び、また、Simon Gatrell は “local historian”¹⁰⁾ と呼んで

いる。

このような姿勢を持つ語り手（≡ハーディ）は、ウェセックスの田舎地方には個性あふれる人々が生き残りを残していることを記録していく。それぞれの話を簡略ながら紹介するところである。

第一作目の“The Three Strangers”においては、羊飼一家の次女の誕生祝いパーティのさなか、見知らぬ客人が三人時間差を置いて雨宿りのために羊飼一家の家を訪れ、そこで、脱獄してきた死刑囚とその死刑囚を死刑執行のために Casterbridge に行く途中の死刑執行人とが同席することになり、死刑囚は相手の客人が死刑執行人だと分かるが、執行人やその他の招待客たちは一番目の客人が死刑囚だとは知らないという *dramatic irony* の状況で、三人目の客人が入ってくるなり、あわてふためいて、逃げ出していったことから、その三人目の客人こそ脱獄した死刑囚に違いないということで、その死刑囚と覚しき人物の探索のてんやわんやの茶番劇が繰り広げられる様が描かれている。この短編に関して、Oxford World's Classics の“Introduction”を書いている Kathryn R. King は、ナポレオン戦争後の時代状況を念頭に置いてこの短編を読めば、家族を養うために家畜泥棒をしたため、死刑に処されることになった挙げ句脱獄した Summers や、死刑執行人が不況のあおりを受けて出身地では仕事がなく、Casterbridge まで出稼ぎ途中であったことなど、この物語の含意するところの背景まで理解が深まる、としている。

第二作目は、“A Tradition of Eighteen Hundred and Four”で、三重の時間の枠組みを持つ作品であることは既に指摘したが、Napoleon Bonaparte が部下と共に英国侵入のための船の上陸地点を偵察するために密かに英仏海峡を渡って下見に来ていたのを、Selby 爺さんが子供の頃に彼の叔父と共に目撃したということ、これまたハーディと覚しき語り手が彼が子供の頃聞いた、というものである。

第三作目は、“The Melancholy Hussar of the German Legion”で、先ほども指摘したとおり、ハーディが最も多くのソースに依拠しつつ制作した話で、語り手であるハーディが15歳の時に物語の主人公である Phyllis から聞いた内容が語られる。フィリスが恋仲になったドイツの軽騎兵が仲間と共にドイツ軍軽騎兵隊から脱走して母国ドイツに帰ろうとするが首尾悪く逮捕されて銃殺刑に処される話である。これらの三作品はいずれも、語り手の現在から眺望された過去の物語で、語り手の現在時制で物語が閉じている。例えば、“The Three Strangers”を例に取れば、以下が物語最後のパラグラフである。

The grass has long been green on the graves of Shepherd Fennel and his frugal wife; and the guests who made up the christening-party have mainly followed their entertainers to the tomb; the baby in

whose honour they all had met is a matron in the sere and yellow leaf. But the arrival of the three strangers at the shepherd's that night, and the details connected therewith, is a story as well known as ever in the country about Higher Crowstairs.

March 1883.¹¹⁾

第四作目の“The Withered Arm”は、語り手の現在もなければ、登場人物としての語り手もない。third-person narratorによって語られる普通の物語である。しかし、語られる内容は普通どころか異常極まりない。そのせいもあって、ハーディはこの作品の序文の中でこの物語にはモデルがいること、そしてそのモデルを知る古老から聞いた話であることを述べている。更に付言すれば、Martin Rayによれば¹²⁾、その古老は誰であろうハーディの母親Jemimaその人である、という。話の内容は、昔農場主の愛人であったRhoda Brookはその農場主に花嫁が来るといので、その花嫁に魔法をかけ、腕が萎びていく呪いをかけた。その花嫁はGertrudeといて、その病気を治すには絞首刑にかけられた直後の囚人の首の部分に触れる必要があると白魔術師から教えられ、それを実行した直後にショックのあまりに亡くなるというものである。話の内容があまりにも異常なので、ハーディは序文中で、“for the cure of some eating disease”で、若い頃死刑囚の死体に触れることで体内の血流を逆流させたことのある老婆がまだ存命であった、と話の背景に対する傍証に言及している。

第五作目の“Fellow-Townsmen”は、Port-Bredyという町のBarnet家とDowne家のそれぞれの家の主婦がボートの転覆事故に遭遇し、バーネット夫人は助かり、ダウン夫人は亡くなるということで、その後それぞれの残された家族がどうなるかが追跡される物語である。この作品においても、“The Withered Arm”と同様に、third-person narratorによって語られる普通の物語である。

第六作目の“Interlopers at the Knap”は、third-person narratorによって語られ、その語り手の現在時制で始まっているものの、現在時制では閉じてはいない。語られる内容は以下の通り。農場主Charles DartonはHintockの酪農家一家のHall家の長女Sallyに求婚するが折り悪く上首尾には運ばず、そのホール家で、彼の昔の恋人で、その家の長男と結婚しているHelenaと出くわし、その長男が病死したことで、結局ダートンはヘレナと結婚する。しかし、やがてそのヘレナも亡くなり、ダートンは再度サリーに求婚するが断られ、サリーは何人かの男性から求婚されるが全て断り、誰とも結婚しないで終わる、という物語である。

この短編集の最後を飾る“The Distracted Preacher”は、19世紀の初期に英国南部一帯でブランドーの密輸入が一大事業として実際行われていたのを題材として、その密輸入に関わるMrs. Lizzy Newberryと代理牧師のStockdaleとの恋愛をからませた物語となっている。但し、

この恋愛物語はフィクションであるという。密輸入に関わった者たちは Lizzy を除いて沿岸警備隊に逮捕されて巡回裁判にかけられ、首謀者の Owlett は国外脱出を遂げ、Lizzy と Stockdale とは結婚して物語は終わっている。この物語では third-person narrator が語り手の現在から 1830 年代のある年の 1 月 13 日のことというふうに過去を振り返る視座から語っていく。そして語り手は最後にこの物語を作成した語り手の現在を “April 1879” と記している。この物語のソースは、ハーディの父の元で 40 年以上も働いた人で、smugglers の一人でもあった James Selby である。また、ハーディの祖父も密輸入に関わっていたということであるから、この物語はハーディにとって記録として残しておきたいトピックスを扱っているのである。

以上、個々の物語の内容を確認したことから分かるように、この短編集は、ハーディの長編の主要小説と比べて読み応えはないが、しかし、この小論の序論でも述べたように、ハーディはこの選集を 2 回も作品の入れ替えをして完成しているのであって、相当の思い入れがあったものと思われる。その証拠に、彼の作品のタイトルで “Wessex” という言葉を持つ最初の作品が *Wessex Tales* であり、1912 年の決定版での作品の入れ替えによって、Wessex というテーマで一貫性を持つ選集となったのである。

Wessex と言えば、Simon Gatrell によれば、今日のハーディ小説の読者にお馴染みの Wessex の世界は、ハーディが小説を書き始めた頃には、ハーディの頭の中にすら存在していなかった¹³⁾。その Wessex の世界が完成するのは、同じく Simon Gatrell によれば、ハーディ最後の 3 つの長編小説においてだ¹⁴⁾、ということだが、その Wessex の世界の完成のプロセスと Wessex をタイトルにもつ *Wessex Tales* とは何らかの関係があるのであって、その観点からこの短編集を評価することができるのではないか、と思われる。そこで、Simon Gatrell が明らかにしていることを次に確認しておきたい。

III Wessex の世界の完成のプロセス

まず、簡略ながらどのようなプロセスで Wessex の世界が完成するのか、Simon Gatrell の論文¹⁵⁾を要約しておこう。

Wessex という語は、ハーディが取り上げるまでは、中世初期に栄えたイギリス南部にあった Anglo-Saxon の王国の一つの名前に過ぎなかった。それをハーディが Wessex という言葉を発掘し、彼の小説の舞台名として使うようになってから彼の小説の舞台を指すようになった。

今日の読者、批評家が Hardy's Wessex として知る世界は、ハーディが小説を書き始めたときには彼の想像の中にすら存在していなかったし、Hardy's Wessex の世界が完成するのは彼の最後の 3 つの小説の執筆時においてである。いやもっと厳密に言えば、彼の最初の選集 1895-96

年版において Hardy's Wessex は完成すると言えるのである。

The Poor Man and the Lady (1868) とか *Desperate Remedies* (1871)、*Under the Greenwood Tree* (1872) を制作していた頃は、ハーディには Wessex という世界を創り上げようという意識はなかったようだ。

また、これらの作品を制作していた頃、ハーディは north Cornwall の彼の未来の妻 Emma Lavinia Gifford に求婚中であった。そんな中、出版者であり編集者である William Tinsley から連載を依頼されたとき、舞台を Cornwall として *A Pair of Blue Eyes* (1873) を制作するのであるが、この作品は、胚のような状態にある Wessex の展開・成長に何ら貢献することはなかった。

Under the Greenwood Tree でもまだ Wessex を創り上げようという考えはなかったようである。しかしハーディは、*Far from the Madding Crowd* (1874) の中で初めて“Wessex”という言葉を使ったのであった。

The Hand of Ethelberta (1875) では Wessex は the equivalent of Dorset であった。

The Return of the Native (1878) で再び Wessex の世界に戻ってくるのであるが、またこの作品の世界は、outside the back-door of Hardy's birthplace であり、この作品の中で Wessex の culture として、the bonfire-making、the mumming、the maypole dancing などが描かれることになる。そしてそのような描写を通して、

“Wessex grows through such accounts of community and practice, ...”¹⁶⁾

ということである。

そして、*The Trumpet-Major* (1880) を創作しているあたりで、Wessex に関するハーディの概念が円熟期に入ってきた、という。そして、Wessex の世界を支える理論的根拠が必要になり、それが記録されざる文化の重要性だ、という。物言わぬ、記録されざる人々の織りなす共同体としての Wessex の世界が描き出されているのが *Wessex Tales* 中の短編の一つ“*The Three Strangers*”だ、と Simon Gatrell は指摘する。

Two on a Tower (1882) と *The Mayor of Casterbridge* (1886) との間には、4年の歳月があるのだが、その間、ハーディの Wessex に関する理解が更に進展したようである。それは、ハーディが *Dochester* に戻り、そこで家¹⁷⁾を建て、彼の結婚生活で初めて自分の所有する家で落ち着くことになるからである。そしてハーディは *Dochester* の Wessex 名である *Casterbridge* に、*Egdon Heath* に賦与したのと同じような豊かな意味づけをしていくのである。つまり、ハーディが創作したほとんどの小説の世界の首都である *Casterbridge* を先史時代からローマ時代を経てそれ以降という歴史的な文脈の中に置いて、*Casterbridge* とその周辺地域との相互関係を

描くことで、Casterbridge をこの地域一帯の中心に据えて、Wessex の世界をより強固なものにしていったのである。そして、

For the first time in this novel (= *The Mayor of Casterbridge*), also, we observe Hardy acting overtly as local historian for the more accurate information of his readers. (p. 25)

このように *The Mayor* で初めてハーディは“local historian”として、彼の読者に正確な情報を提供する立場に身を置いているのである。

次に *The Woodlanders* (1887) についてであるが、この作品は、Little Hintock という“enclosed and isolated”の世界が舞台であり、それはハーディの祖母 Betty Swetman の生まれ故郷ではあるものの、Casterbridge を中心とする Wessex の世界の関係作りという文脈から見ると後退のように見えて、ハーディがこのような舞台を選んで作品を創作するというのは驚くべきことだが、しかしこの作品の origin が1870年代のものであって、それが後退のように見える理由であり、ハーディはとにかく早くこの作品を完成させたかったようである。しかしこの作品で明らかなのは、

There is also in the novel (= *The Woodlanders*) direct and indirect evidence that for Hardy Wessex had still not expanded beyond Dorset, (p. 26)

つまり、Wessex の世界はまだ Dorsetshire と同じ範囲でしかなかったということである。

筆者がこの試論で扱う *Wessex Tales* (1888) について、Simon Gatrell がどのようなことを述べているかを見てみるときが来た。ハーディはそれまでの10年間で各種の雑誌に発表してきた短編を集めて *Wessex Tales* としたのだが、この短編集を纏めるにあたって、Wessex の世界に対するハーディの把握が相当に深まってきたので、それまで出版されている作品に関して変更をする必要性をハーディは初めて感じた、と Simon Gatrell は指摘する。例えば、“Fellow-Townsmen”の舞台は1880年に初めて雑誌に掲載されたときには名前が与えられていなかったが、1888年の *Wessex Tales* の中では、ハーディは Port-Bredy (実名 Bridport) を与えたのである。このことよりももっと重要なのは、“The Distracted Preacher”における地名を Dorset の地名から Wessex の地名に変更した点である。要するに、*Wessex Tales* は、ハーディがそれまで発表してきた作品における Wessex の世界の各地名の統一性を図ろうとするきっかけになった作品だ、と Gatrell は指摘する。

しかしながら、*Wessex Tales* を出版した頃のハーディは、まだ、彼の小説全部が全部 Wessex

novels だとは考えていなかった。しかしハーディのこの考えがまもなく変更することになる。

Evidently Hardy did not yet consider all his novels Wessex novels, but this would soon change. (p. 26)

すなわち、*Tess of the d'Urvilles* (1891) の創作で Wessex の世界の範囲が変わる、言い換えれば、拡大する、のである。つまり、ハーディが『テス』の最後のあたりを制作しているときに、彼がそれまで Wessex としてきた地域は Wessex と本来呼ばれるべき地域の一部分に過ぎない、という結論に達した、というのである。方言、風習、環境、歴史、社会に関する限り、Hampshire、Wiltshire、Somerset、Devon も Wessex と言うべきであって、これらの地域は人工的に Dorset と区切られていただけである、と。そして、Hampshire の州都 Winchester は Wessex 王国の古代の首都であったのである。

Angel と Tess とが Melchester (実名 Salisbury) に歩いていくときに、ハーディは、二人が Upper Wessex と Mid Wessex との国境を横切ったと書いたが、それが、

This is the earliest indication anywhere of the expansion of Wessex, and the establishment of a wider county-based geographical system for Hardy's fiction. Earliest references to Wessex in the manuscript were to the familiar Dorset-equivalent, and had to be revised, before the novel saw print, to South Wessex. So we can say with some confidence that in September or October of 1890 Hardy first formulated for himself the idea of Wessex as twentieth-century readers have been accustomed to experience it. (p. 27)

と、Simon Gatrell は、20世紀の読者が知る広い Wessex をハーディが初めて公式化したのが1890年の9月か10月だろうと特定しているのである。そしてこの広くなった Wessex を Simon Gatrell は彼のこの論文の中で New Wessex と言っているのである。

ハーディは、1892年9月、彼の作品の初めての統一版を出版するにあたって、この広くなった Wessex と個々の作品との関係性の統一を図ろうとしたのである。つまり、彼の小説家としての初期の頃、彼の小説の舞台を読者に特定されないようにするために、実際の距離、方角などを小説中では意図的に変更を加えていたのを、この統一版では実際の距離、方角などに戻したり、地名にも統一を図るため変更を加えていった、というのである。『テス』において、Wessex の世界が Simon Gatrell が言うところの “New Wessex” として拡大した結果、*Jude the Obscure* (1895) は、*The Return of the Native* とか *The Mayor of Casterbridge* とかが Wessex novels

という文脈からは Wessex novel とは言えないが、この拡大した “New Wessex” という観点からなら Wessex novel と言うことができるのである。

Simon Gatrell が明らかにしているのは以上ばかりではないが、Wessex の世界が今日の読者が知るようなものになったプロセスのみに限定して、Gatrell が明らかにしている内容を要約すると以上ようになるだろう。

IV *Wessex Tales* の持つ意味

前節でどのようなプロセスを経て20世紀の読者が知る広い Wessex が完成していくのかについて Simon Gatrell が明らかにしているところを要約したのだが、その中で Simon Gatrell は、*Wessex Tales* が Wessex の世界の各地名の統一性を図ろうとするきっかけになった作品だと指摘する¹⁸⁾。実は、この作品はそれだけの意味ではなくてそれ以上の意味を持っていたのである。すなわち、この作品は Wessex の世界が完成する前に制作されたのであり、ハーディが Wessex の世界を完成させようという意識でまとめ上げた作品が *Wessex Tales* であり、この *Wessex Tales* は Wessex という名前に対してハーディが特許権を宣言する書であった、ということである。このことを Martin Ray は、次のように明確に指摘する。

Wessex Tales was Hardy's first use of the term "Wessex" in any of his titles and as such it represents a declaration of his sovereign right to use the name for his fictional landscape. It was probably around this time that he wrote Edward Marston, the publisher, with instructions to 'use the words "Wessex novels"' when advertising his work:...¹⁹⁾

そして、Martin Ray は上掲の引用文中で指摘しているハーディの Edward Marston 宛の手紙の一部しか引用していないので、全てを引用するところである。

1888

To Edward Marston

Max Gate, Dorchester (1888?)

Dear Mr. Marston,

Could you, whenever advertising my books, use the words "Wessex novels" at the head of the

list? I mean, instead of “By T. H.,” “T. H.’s Wessex novels,” or something of the sort? I find that the name Wessex, wh. I was the first to use in fiction, is getting to be taken up everywhere: & it would be a pity for us to lose the right to it for want of asserting it. It might also be used on paper covers of the novels.

Yours very truly

T. Hardy²⁰⁾

ハーディの上掲の手紙から、Wessex という名前に対するハーディの強い所有欲とイギリス文学史上に自分の小説が“T. H.’s Wessex novels”として記憶されて欲しいという並々ならぬ願望が読み取れることだろう。

注

- 1) Martin Ray, *Thomas Hardy: A Textual Study of the Short Stories* (Hants: Ashgate Publishing Limited, 1997), p. 3.
- 2) Kathryn R. King (ed.), *Thomas Hardy Wessex Tales* (Oxford World’s Classics) (Oxford: Oxford University Press, 1991), pp. xxi–xxiv (“Notes on the Text”).
- 3) Kristin Brady, *The Short Stories of Thomas Hardy* (New York: St. Martin’s Press, 1982).
- 4) J. I. M. Stewart, *Thomas Hardy* (London: Allen Lane, 1971), p. 147.
- 5) Richard Little Purdy, *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* (Oxford: The Clarendon Press, First Published in 1954, Reprinted in 1968 and 1978). *Wessex Tales* の各短編の初出出版年及び雑誌についての情報はこの研究書による。なお、巻末の「*Wessex Tales* 作品情報テーブル」の「その他」の欄に示す。
- 6) Kristin Brady, *op. cit.*, p. 2.
- 7) *Loc. cit.*
- 8) Kathryn R. King (ed.), “Introduction” to *Thomas Hardy Wessex Tales*, p. xx.
- 9) Kristin Brady, *op. cit.*, p. 2.
- 10) Dale Kramer (ed.), *The Cambridge Companion to Thomas Hardy* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999) の中の論文 “2 Wessex” by Simon Gatrell, p. 25.
- 11) Kathryn R. King (ed.), *op. cit.*, pp. 30–31.
- 12) Martin Ray, *op. cit.*, p. 35.
- 13) Dale Kramer (ed.), *op. cit.*, p. 19.
- 14) *Loc. cit.*
- 15) Dale Kramer (ed.), *op. cit.*, pp. 19–37.
- 16) *Ibid.*, p. 23. この節における Gatrell からの引用は、すべてこの版からであり、以下の引用等はすべて括弧に入れて示す。
- 17) Max Gate のことであろうと思われる。
- 18) Dale Kramer (ed.), *op. cit.*, p. 26.
- 19) Martin Ray, *op. cit.*, p. 3.
- 20) Richard Little Purdy and Michael Millgate, eds., *The Collected Letters of Thomas Hardy*, vol. 1 (Oxford: The Clarendon Press, 1978), p. 171.

Wessex Tales 作品情報テーブル

作品名+登場人物	舞台+対象年代	その他
<p>“The Three Strangers”</p> <ul style="list-style-type: none"> Shepherd Fennel と Mrs. Fennel 及びパーティの客たち Three Strangers 1) 脱獄した死刑囚(=Timothy Summers) 2) hangman 3) 死刑囚の兄 	<ul style="list-style-type: none"> Higher Crowstairs (Casterbridge から 3 マイルと離れていない高原地にある羊飼一家の cottage. Shottsford と Casterbridge との間にある。) 時代設定は 1820 年代か 1830 年代。 	<ul style="list-style-type: none"> 語り手の現在時制で始まり、語り手の現在時制で終わっている。 dramatic irony Purdy の情報: <i>Longman's Magazine</i> March 1883
<p>“A Tradition of Eighteen Hundred and Four”</p> <ul style="list-style-type: none"> ハーディの語り手 Solomon Selby (作中の頼りにならない語り手) Selby の叔父 (=Job) Napoleon Bonaparte と覚しき人物 その部下たち 	<ul style="list-style-type: none"> 高原地 Lulworth Cove 時代設定は 1804 年。 	<ul style="list-style-type: none"> 語りの入れ子構造 (外の時間枠は語り手の現在。語り手の現在時制で始まり、語り手の現在時制で終わっている。) Purdy の情報: As ‘A Legend of the Year Eighteen Hundred and Four’ in <i>Harper's Christmas</i>, December 1882
<p>“The Melancholy Hussar of the German Legion”</p> <ul style="list-style-type: none"> ハーディ自身と覚しき語り手 Phyllis その父 Dr. Grove Humphry Gould Matthäus Tina (ドイツ軍軽騎兵) その友人 Christoph 	<ul style="list-style-type: none"> Bincomb Down (Weymouth 近くの高原地) (これは James Brushrod が逃亡した兵士たちが銃殺されるのを目撃した場所である。Martin Ray p. 22 による。) 時代設定は 1801 年。 	<ul style="list-style-type: none"> 語り手の現在時制で始まり、語り手の現在時制で終わっている。 ハーディ自身と覚しき語り手が Phyllis から直接聞いた話。 Purdy の情報: <i>the British Times and Mirror</i>, 4 and 11 January 1890
<p>“The Withered Arm”</p> <ul style="list-style-type: none"> Rhoda Brook その息子 Gertrude Farmer Lodge 	<ul style="list-style-type: none"> Holmstoke にある酪農場 Oxford World's Classics 版の “Introduction” は時代設定を 1818 年から 1825 年としている。 テキスト p. 7 の Trendle の話からすると、時代設定は 1819 年から 1825 年までとなる。 	<ul style="list-style-type: none"> 語り手の現在もなければ、登場人物としての語り手もない。third-person narrator によって語られる普通の物語の体裁を取っている。しかし、語られる内容は普通どころか、異常極まりない。 語り手の現在時制は p. 59 に出てくる。 Purdy の情報: <i>Blackwood Edinburgh Magazine</i>, January 1888
<p>“Fellow-Townsmen”</p> <ul style="list-style-type: none"> Mr. Barnet その妻 Mr. Downe その妻 Miss Savile (Lucy Savile) 	<ul style="list-style-type: none"> 舞台は Port-Bredy 時代設定は 1845 年頃 	<ul style="list-style-type: none"> “The Withered Arm” と同様に third-person narrator による語り。 Purdy の情報: <i>the New Quarterly Magazine</i> 1880

Christin Brady による情報	Martin Ray による情報
	<ul style="list-style-type: none"> ・ハーディは Timothy Summers とその兄の住んでいる町を Shottsford に変えた (p. 11)。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ハーディは 1878 年と 1879 年に the British Museum で調査し、それを元にして <i>The Trumpet-Major</i> を創作するのだが、この時の調査を利用して、この作品を創作したのである (p. 14)。例えば、1803 年 11 月 2 日付けの the <i>True Briton</i> 誌。 ・source として、その他にハーディの父や古老たちから、ナポレオン戦争のこと、ナポレオン軍上陸の恐れがあったこと、また、イギリス軍の軍隊が Weymouth 近くの高原地に野営していたことなどを聞いた。
<ul style="list-style-type: none"> ・ハーディは the original of Phyllis Grove を知る古老たちから聞いた (p. 3)。 ・ハーディは昔の新聞や教会の記録簿を調べることで、兵士たちの処刑と埋葬についての説明を見つけた。 ・語り手は 47 才。彼が 15 才の時に Phyllis 自身から聞いたという設定になっている (実際は、ハーディが 15 才の時に当の老婦人から聞いたのだという。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・この物語にはモデルがいる。 ・この物語のソースとして Ray は以下のものを挙げている。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 2 人のヨーク軽騎兵が処刑されるのを目撃した James Brushrod of Broadmaye が James Selby にその詳細を語り、その Selby が the writer (ハーディ) に語ったのである。 2) ハーディは 1801 年 7 月 6 日号の <i>The Times</i> の切り抜きをしていた。 3) Phyllis のモデルと覚しき老婆からハーディは話を聞いている。 4) ハーディは教会の記録簿で情報を確認している。
<ul style="list-style-type: none"> ・the third-person narrator の存在は、この話の信じがたい内容に対して、語り手の中立性を維持するのに役立っている (p. 21)。 ・Rushy-Pond から Gertrude が Casterbridge の監獄の正面を見る場面は、子供の頃のハーディが望遠鏡を使って、絞首刑を目撃したのを思い出させる (p. 27)。(Life. pp. 32-3) この件に関しては Martin Ray も言及している (pp. 39-40)。 ・Rhoda の息子が 18 才で絞首刑にかけられた話では、ハーディが父親から聞いた話が利用されている (p. 28)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・この話のソースはハーディの両親である。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 母親からは conjurors と incubus の影響について。 2) 父親からは 18 才の少年の処刑について (実際、父親はその処刑を目撃したという。) ・<i>Wessex Tales</i> の 1896 年版の Preface 中の the aged friend は母親の Jemima だろうという (p. 35)。 ・この話も事実に基づいており、モデルがいるという。
<ul style="list-style-type: none"> ・Christin Brady も時代設定を 1845 年あたりとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・in the serial では the railway junction の Maiden Newton と Bridport (Port-Bredy) との距離を 20 マイルとしていたが、ハーディは 1888 年版において実際の距離に近い a dozen miles に変えている (p. 46)。

作品名+登場人物	舞台+対象年代	その他
<p>“Interlopers at the Knap”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農場主 Charles Darton ・その友人 Japheth Johns ・Sally Hall ・その母 ・Sally の兄 Phillip ・その妻の Helena ・彼らの二人の子供たち 	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台は Hintock (他に出てくる地名として、Evershead、Chalk Newton、Casterbridge) ・語り手の現在から数年前の時間から始まっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・書き出しは語り手の現在時制である。 ・third-person narrator による語り。 ・Purdy の情報：the <i>English Illustrated Magazine</i>, May 1884
<p>“The Distracted Preacher”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Mr. Stockdale (若い代理牧師) ・家主の Lizzy Newberry ・そのいとこ Owlett ・Lizzy の母親 Mrs. Simpkins 	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台は、Nether-Moynton(他に出てくる地名は Ringsworth、Lulwind Cove、Dagger’s Grave、Shaldon Down、Shaldon、Warm’ell Cross) ・時代設定は1830年代。 	<ul style="list-style-type: none"> ・third-person narrator ・ハーディは Swanage (ハーディ・カントリー名では Knollsea) に夫婦で滞在中 (1875-6) に宿の主人から密輸入の話を聞いた。 ・作者注が物語の最後に付されていて、モデルたちの実際の顛末が示されている。 ・Purdy の情報：as ‘The Distracted Young Preacher’ in the <i>New Quarterly Magazine</i>, April 1879

Christin Brady による情報	Martin Ray による情報
<ul style="list-style-type: none"> ・この作品の時代設定を特定するのは難しいが、登場人物の一人 Darton が <i>The Mayor of Casterbridge</i> にも登場していることを考えると、19世紀の中頃のどこかであろうと考えられる (p. 3)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハーディの父親は1839年に結婚する前の晩に Puddletown から Melbury Osmond まで旅をしているが、その旅が利用されて、Charles Darton の旅に反映されているという。ハーディの父の付き添い役は、Jemima の brother-in-law の James Sparks だったという (p. 27)。 ・Sally の家は Melbury Osmond の Jemima の先祖の家がモデルである。 ・舞台は Hintock で、<i>The Woodlanders</i> 制作の2年前の作品である。 ・Martin Ray も Darton が <i>The Mayor</i> に登場していることを考慮して、この作品の時代設定を19世紀中頃だとしている。
	<ul style="list-style-type: none"> ・この物語のソース 1) James Selby (ハーディの父の元で40年以上も働いた人で、smugglers の一人) 2) ハーディの祖父も smuggling に関わっていた。 3) George Nicholls (この人は a retired coast guard) 4) Captain Joseph Masters (ハーディ夫妻が1875-6年に滞在していた宿の主人) ・時代設定は1830年。 ・ハーディは1830年8月5日付の the <i>Dorset County Chronicle</i> から、Lulworth Cove での smuggling に関わっていた3人の男たちに関する裁判記録をメモしていた。その中に Hewlett という男がいて、この人物が Owlett のモデルである。 ・the preacher と Lizzy との恋愛は fiction であるということ。